

研究班報告 4 戦後東南アジア情勢と域外大国の関係についての研究

「毛沢東の思想」をめぐる日中学術交流

近藤 邦康

1996年12月23日—97年1月2日北京, 97年1月2日—1月7日上海で、「毛沢東の思想」をめぐる日中学術交流を行なった。第一に、「毛沢東の思想——四回の哲学的思考」(中国文10800字)を、①12月27日中国社会科学院近代史研究所(張海鵬所長司会, 13名出席), ②1月3日上海社会科学院歴史研究所(熊月之副所長司会, 17名出席), の報告会で約1時間報告して, 約1時間討論した。第二に, 以下のように専門家と2時間ないし3時間個人面談を行ない, 密度の高い議論をした。①12月24日丁守和・楊天石(中国社会科学院近代史研究所), ②12月25日楊奎松(同上), ③12月26日蕭延中(中国人民大学党史系), ④12月28日李君如(中共中央宣传部, 上海社会科学院毛沢東思想研究中心), ⑤12月30日金冲及(中共中央文献研究室), ⑥12月31日丁守和, ⑦1月1日石仲泉(中共中央党史研究室), ⑧1月5日蘇智良(上海師範大学歴史系), ⑨1月6日吳軍・胡振平(上海社会科学院哲学研究所)。旅行日3日と休息2日を除いて, ほぼ連日学術交流を行なったことになる。

私の報告は, 1996年12月4日国際比較政治研究所の研究会での報告を発展させたものである。(1)1917—1921, 早期思想。(2)1935—1938, 「実践論」「矛盾論」。(3)1956—1957, 「十大関係論」「人民内部矛盾」。(4)1963—1965, 哲学講話。の四回の哲学的思考の高潮を考察し, それらの間の連続と変化を解明することによって, 毛沢東の思想の展開の大筋を把握しようとした。「毛沢東の思想」全体を書こうとして, 1949—1976年の「建設者毛沢東」を先に書いてみたところ, 中国人が中共中央「歴史決議」の大枠を守り, 豊富な未公開資料を利用して書いた事実経過の筋道にひきずられてしまい, それをきわめて不満に思っ, なんとかして自分なりに筋道をつけようとした

のである。今回はとくに, (2)のソ連哲学教科書の吸収と「実践論」「矛盾論」の執筆との関係に重点を置いた。私の報告はかなりよく理解されたようで, 適切な質問や批判を受けた。革命期3回, 建設期5回の哲学的思考の高潮を考えるべきだ, と助言してくれた人もいた。

個人面談において, 60歳以上の解放世代は, 革命時期と建国初期に毛沢東を心の底から信じたが, 文化大革命後期から次第に疑問をいだき毛から自立していった, という思想遍歴を率直に語ってくれた。今もなお, 毛沢東との格闘と対話が続いているように見うけられた。また, 40代の紅衛兵世代が, 文化大革命の体験を反芻しながら文革後に猛烈に勉強して, 上の世代にない大胆な発想によって多彩な研究を生み出し, 第一線を担いはじめたことに, 強い印象を受けた。

解放世代の一人は語った, 毛沢東は革命に成功したが, 建設は経済建設に全力を集中しないで階級闘争をやり, 民主政治をやらず個人専断をやって, 失敗した, 革命で蒋介石の数百万の大軍に対峙したときの慎重さが建設ではなくなり, 自分がやろうと思うことは何でもできるという唯意志論に陥ったからだ, と。別の一人は言った, 毛沢東は元来慎重な人であったが, 建設の新しい問題に直面して一層慎重になるべきだった時に, 逆に一層自信を持って自分が正しいと思いこんでしまい, 状況が全く分らなくなってしまった, 私は毛を深く信じて, よく分らないときはいつも, 毛が正しく自分が間違っていると考えたので, 1975年末になってやっと毛の誤りに気づいた, と。いずれも, 自らの苦しい体験に裏づけられた重い言葉であった。

しかし, 私は, 毛沢東は建設期においても, 強大な米ソに対抗して中国の独立自主を堅持するという方面では, 革命期の慎重さが継続

していたのではないか、国内政治を国際政治と関連させて考察することが必要ではないか、という疑問を持った。それで、(一)文化大革命の毛沢東と劉少奇の対立には、ベトナム戦争で米国に対抗するのに反ソを取るか連ソを取るかの対立が含まれていたのではないか、(二)毛沢東が文化大革命を起こした動機のなかには、共産党が自らの官僚主義を人民大衆の批判を受けとめて克服する、という理想主義が含まれていたのではないかと数人に質問してみた。

(一)については、文化大革命はベトナム戦争とは無関係だ、毛沢東は、米国の外からの侵略よりも、中国のフルシチョフの出現による内からの崩壊の方を一層警戒していた、という答えが返ってきた。だが、文化大革命の原因の一つは、当時中国が全面包囲されていたことにあるが、あの状況でも、階級闘争でなく経済建設に主力を注ぐべきだった、という意見もあった。自分は中国の通説よりも近藤説の方に近い、という人もいた。(二)については、毛の文化大革命の動機には、共産党の官僚主義を克服するという意図が含まれていたけれども、あの方法では成功しない、という風に考える人が予想以上に多かった。上海へ行ってから、文化大革命を、先ず中ソ論争という理論レベルと結びつけて考え、次にベトナム戦争という政策レベルと関連づけて考える方がよい、と気づいて、その線で質問したところ、私の考え方がかなりよく理解され、双方の距離が縮まったように思われた。

紅衛兵世代からは、文化大革命期に、「知識青年が農村へ行って、貧農・下層中農の再教

育を受けることが、きわめて必要だ」という毛沢東の指示を心から信じて、農村で3年間労働した体験を聞いた。行ってみると、農村はあまりにもおくれており、貧農・下層中農は文化水準が低く、一家が食っていくことに精一杯で自分のことしか考えず(「自私」)、かれらから再教育を受けるという理想は破れ、幻滅した、農村を改造しようとしたが、鋤などの原始的な道具しかないのでやりようがなく、まず都市を工業化して進んだ生産用具を作り農村に持ち込むほかないと思った、と言う。あの運動全体は失敗であり否定すべきだが、農村で鍛錬されて国情を深く理解した1600万の都市知識青年が、現在各分野で重要な地位について改革の担い手になっていることと、当時も農村の改造にある程度の役割を果たしたことを、重視すべきだ、と語る。これもまた、毛沢東を深く信じて実践するなかで毛から自立した、もう一つの類型であろう。

全体をふりかえると、中国の毛沢東研究には、鄧小平の改革・開放を成功させたい、そのため毛から鄧への継承・発展の関係を強調したい、という実用的な動機が太い線としてあること、他方そこからはみだすものもあること、をあらためて痛感した。

1月6日に旧知の湯志鈞さん(上海社会科学院歴史研究所)にご馳走になり、日中双方の学界の状況などについて歓談して、3年3か月ぶりの中国訪問をしめくくった。

2週間余の短い期間に、豊富な貴重な情報を、非常に効率よく与えて下さった中国の方方に、心から感謝したい。

(1997年1月22日。「日中学術交流の報告(四)」)

| | | |
|-------------------------------|---------|---------------------------|
| 目次 | | ICPS ニュース・レター |
| はじめに | 安 世舟 2 | 第6号 1997年3月 |
| 研究班報告 | | 編集・発行：国際比較政治研究所(大東文化大学) |
| 1. スウェーデンにおける地方自治体改革の諸相 | 穴見 明 5 | 〒175 東京都板橋区高島平1-9-1 |
| 2. 大正デモクラシー期オピニオン・ジャーナリズムの一断面 | 和田 守 8 | TEL 03 (5399) 7341 |
| 3. 21世紀における東アジアの国際秩序—韓国と日本 | 安 世舟 10 | FAX 03 (5399) 7379 (政治学科) |
| 4. 「毛沢東の思想」をめぐる日中学術交流 | 近藤邦康 12 | 印刷：コロニー印刷 |